

兵庫県森林動物研究センター シンポジウム

「野生動物の保全と管理の最前線」

ストップ・ザ・獣害

被害対策への挑戦



日時：2014年2月15日(土)

13:30～16:30

会場：兵庫県立美術館

ミュージアムホール

主催



兵庫県
森林動物研究センター



開催趣旨

野生動物問題の解決のための調査研究を担う森林動物研究センターは、今年度で設立から7年になりました。シカ、イノシシ、アライグマなどの被害の深刻な野生動物を中心に、保護管理計画等の策定から現場の対策技術まで、これまで取り組んできた多くの研究の成果が実を結びつつあります。このシンポジウムでは、これらの成果を紹介しながら、兵庫県の野生動物管理の今後を展望します。



プログラム

開会 13:30

開会あいさつ

河合 雅雄（森林動物研究センター 所長）

話題提供

1. 兵庫県における野生動物管理の現状と展望

横山 真弓（森林動物研究センター 主任研究員）

2. 兵庫県におけるシカによる森林生態系被害の現状

藤木 大介（森林動物研究センター 主任研究員）

3. 研究成果の産・官・住民3方向への展開

坂田 宏志（森林動物研究センター 主任研究員）

4. 地域全体の協力で進めるシカ、イノシシ、アライグマの捕獲

松本 崇（森林動物研究センター 研究技術専門員）

パネルディスカッション

コーディネーター 林 良博（森林動物研究センター 研究統括監）

閉会 16:30



開会あいさつ



河合 雅雄（かわい まさを）

【現在の役職】

兵庫県森林動物研究センター 所長
京都大学 名誉教授
兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長
兵庫県立丹波の森公苑 名誉公苑長 等

【主な著書】

「人類以前の社会学—アフリカに霊長類を探る」（教育社）
「子どもと自然」（岩波書店）
「人間の由来上・下」（小学館）
「少年動物誌」（福音館書店）
「河合雅雄著作集全13巻」（小学館）
「河合雅雄の動物記(1)～(6)」（フレーベル館）
「ユカの花物語」（小学館）
「サル学者の自然生活讃歌 森に還ろう」（小学館）
「小さな博物誌」（小学館）
「動物たちの反乱 増えすぎるシカ、人里へ出るクマ」（PHP新書）
その他多数

【主な経歴】

1952年 京都大学理学部卒業
1970年 京都大学 教授
1978年 京都大学霊長類研究所 所長
1987年 京都大学名誉教授、財団法人日本モンキーセンター 所長
1991年 日本福祉大学社会福祉学部 教授
1995年 兵庫県立人と自然の博物館 館長

兵庫県における野生動物管理の現状と展望

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員
(専門分野 危機管理学)
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授

横山 真弓
(よこやま まゆみ)



はじめに

兵庫県における本格的な野生動物の保護管理は、平成 11 年の鳥獣保護法の改正が大きな転機となり、平成 12 年にシカの保護管理計画が、平成 15 年にツキノワグマの保護管理計画が施行されました。急激に数が増加し被害が深刻化してきたシカに対し、ツキノワグマは絶滅が心配されていましたが、科学的な情報がほとんどありませんでした。どちらの種も被害を防ぐための対策を行いながら、生息動向や被害の状況をモニタリングするというまさに手さぐりでスタートしました。

特定鳥獣 保護管理計画 (県)	・ニホンジカ・ツキノワグマ ・イノシシ・ニホンザル
特定外来生物 の防除計画 (市町)	・アライグマ (40市町) ・ヌートリア (37市町)

兵庫県及び市町村が策定している
生動物管理に関わる計画

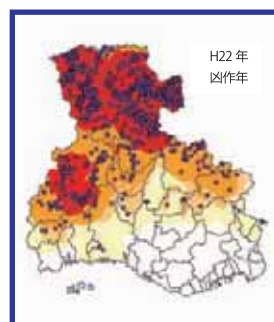
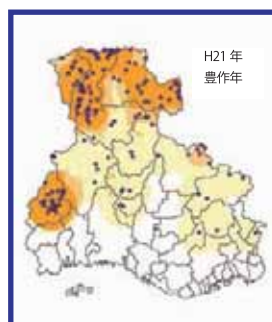
科学的保護管理の進展



平成 23 年度のニホンジカの
推定生息密度

対策を行いながら生息と被害の情報を蓄積・分析し、ニホンジカでは、捕獲の重要性が明らかとなりました。ツキノワグマでは、出没要因をつきとめ、出没の状況に応じた対応区分を設定し、誘引物の管理や学習放獣などの現場対応の仕組みを整えてきました。その後、平成 21 年には、イノシシとニホンザルの保護管理計画が施行され、被害対策を進めながら、データの蓄積を行っています。

外来生物に関する法律は平成 17 年に制定され、様々な対策が進展してきました。なかでも捕獲に従事する人材を広げる取組を計画に盛り込むことができるようになり、地域住民による捕獲の仕組みが整いました。



ツキノワグマの出没の年変化

今後の展望

約 14 年間の様々な取り組みにより兵庫県では、野生動物の生息動向と被害要因などが解明され、防護柵の設置や捕獲は進んできました。しかし、野生動物の増加の勢いが依然として高いこと、里地における社会的課題が大きいことから被害の鎮静にはまだ努力が必要です。特に体制が整っていない地域の問題を解消する必要があります。ニホンジカ・イノシシ・アライグマはこれからも捕獲圧をかけ続ける必要があるため、兵庫県では、新たな捕獲技術の開発や地域住民と協力した捕獲体制づくりなどに取り組んでいます。

兵庫県におけるシカによる森林生態系被害の現状

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員
(専門分野 森林生態学 (生息地管理))
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授

藤木 大介
(ふじき だいすけ)



はじめに

近年、増えすぎたシカによる被害は、農林業被害に留まらず、食害による広葉樹林植生の衰退も全国各地から報告されるようになってきました。兵庫県においても2000年頃より、シカによる広葉樹林植生被害が顕在化してきています。当センターでは独自開発した広域的なモニタリング調査を通して、県内のシカによる広葉樹林被害の実態とその動向把握に努めてきました。



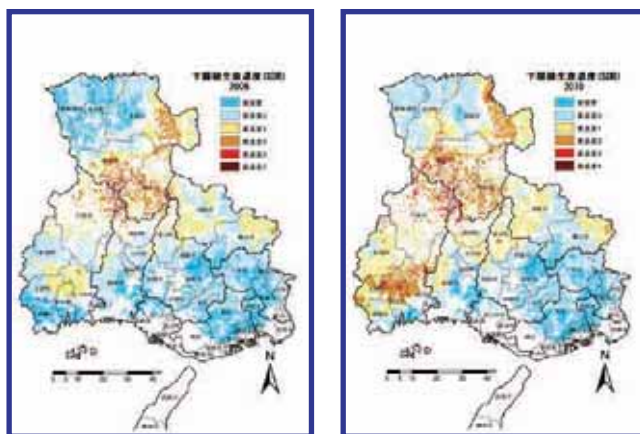
健全な広葉樹林(上) シカにより下層植生が消失した広葉樹林(下)

下層植生を指標とした県域スケールでの被害把握

下層植生の被度を指標に県本州部全域を対象に広域多地点調査を実施することで県域スケールでの被害把握を行いました。その結果、2006年の時点で南但馬地域を中心にシカの食害によって下層植生が半減以上した地域が広域的に分布していることを確認しました。

さらに、その後の4年間で、被害地域は急激に拡大していることも明らかになりました。

下層植生の衰退が進行するにつれ、森林内では、シカの樹皮剥ぎによる上層木の枯死や、生物多様性の減少、土壌侵食被害なども進行することが確認されたことから、シカの食害は、森林のもつ生態系機能を深刻に低下させ得る被害であることが判りました。



下層植生衰退度を用いた被害調査結果
(左：2006年、右：2010年)

森林生態系保全に向けた取組み

森林の生態系機能を維持するうえで許容可能な密度まで、シカの生息密度を低減させる必要があります。当センターでは、シカの生息密度指標と下層植生のモニタリング・データを分析することで、許容可能なシカの生息密度水準や必要捕獲頭数を明らかにするとともに、目標達成に向けた捕獲の取組みを進めています。

研究成果の産・官・住民3方向への展開

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員
(専門分野 個体群生態学(個体数管理))
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授

坂田 宏志
(さかた ひろし)

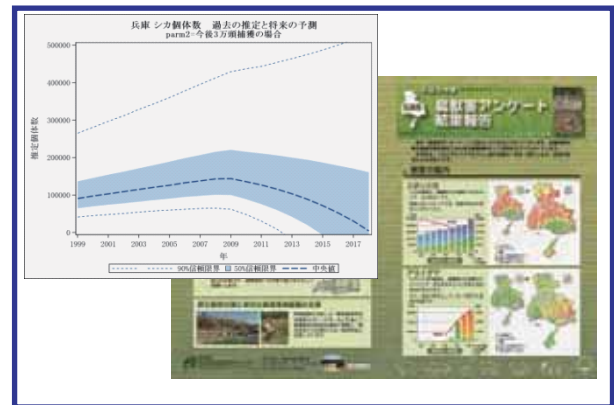


はじめに

森林動物研究センターでは、個体数推定や有害獣の捕獲、シカの有効活用など、野生動物管理のための研究開発を行ってきました。研究成果は、皆様に活用して頂いて、初めて社会に貢献できます。行政施策を通じて、また、企業での製品化やサービスの提供を通じて、さらに、県民の皆さまに直接実践して頂くことを通じて、全国的にも展開してきた当センターの研究成果についてご紹介します。

個体数推定技術の採用

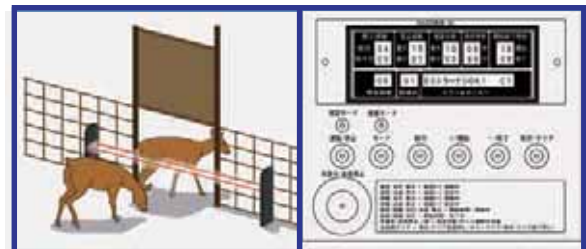
当センターのシカ、イノシシ、ツキノワグマ等の個体数推定や将来予測の技術は全国で採用され始めました。国レベルでは、この技術を用いたシカとイノシシの推定が、昨年8月に環境省から発表され、この結果をふまえて、適切な野生動物管理を進めるための法改正が検討されています。地域的にも、13都県のべ17獣種で、この技術が採用されました。行政機関で活用できる技術を提供することで、貢献が広がっていきます。



将来予測や調査結果のレポート

技術の製品化

AIゲートによる捕獲技術は、製品化後2年程度の間で全国で23都道府県に、100台以上が導入され1000頭以上のシカ、イノシシ等の捕獲実績を上げるようになりました。また、兵庫県立大学で開発されたシカ肉の調理手法を活用した製品も商品化されています。このように民間企業との連携によって、研究成果の意義は高まります。



AIゲート

県民一人一人が取り組める技術の普及

野生動物対策は、多くの人々が協力して取り組む必要があります。特に、人手不足の捕獲班の活動などに、住民も協力して頂くことで、地域全体の対策が活性化します。協力の手順を体系化し、普及することで、地域の対策能力を向上させることもセンターの取り組みの一つです。県民の皆様との協力で、私達の研究成果が生きてきます。

ストップザ獣害 被害対策への挑戦

地域全体の協力で進めるシカ、 イノシシ、アライグマの捕獲

兵庫県森林動物研究センター 研究技術専門員

松本 崇
(まつもと たかし)



はじめに

シカ・イノシシ・アライグマなど野生動物による農業被害を防ぐためには、柵で集落・農地を囲い、侵入を防ぐとともに、捕獲で減らさなければなりません。平成24年度、兵庫県内の集落で設置されているシカ・イノシシ捕獲用のわな（以下集落わな）は、3000基以上あります。しかし、集落わなの捕獲効率は非常に悪く、年間の捕獲頭数が2頭以下の集落は半分以上（52%）にもものぼります。そこで、兵庫県では今年度、集落わなを使っている農家を対象に基本的な捕獲技術を指導することにより、集落わなの捕獲効率をあげることを目的にストップザ獣害事業を行いました。

ストップザ獣害事業の内容と成果

まず、1) わな設置場所の選び方、2) 餌付けによる野生動物の誘引方法、3) 警戒心を解くための餌付け方法、4) 捕獲の仕方、という4つの基本的な捕獲技術を伝える講習会を県内13か所で開催し、効率的なわな捕獲技術の普及に取り組みました。さらに、講習会参加者の中から希望者を募り、あるいは、市町の担当者に集落を選定してもらい、11人の指導員が直接集落に出向き、わな捕獲技術の指導を定期的に行いました（指導対象集落数は計53集落、現地指導回数はH25年12月末現在で計322回）。その結果、昨年度の捕獲実績が2頭以下だった集落の捕獲数の合計は、10倍以上に増加しました（図1）。

今後は、習得した捕獲技術の継承を支援するとともに、捕獲実績が挙がらない集落への技術の普及が望まれるところです。

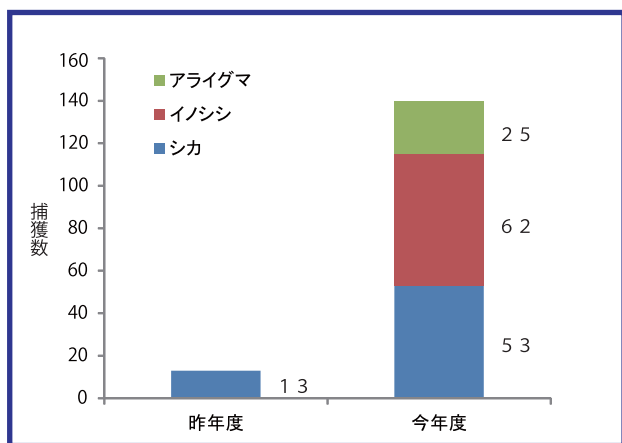


図1 指導集落での捕獲頭数の比較
(昨年度捕獲実績が2頭以下の集落)



集落わなでイノシシ2頭が捕獲



パネルディスカッション

皆様に記入していただいた質問票をもとに進めてまいります。
話題提供を行った、森林動物専門員と研究員による討論を行います。

コーディネーター



林 良博 (はやし よしひろ)

【現在の役職】

兵庫県森林動物研究センター 研究統括監
東京大学 名誉教授
公益財団法人山階鳥類研究所 所長
国立科学博物館 館長 等

【主な著書】

「ヒトと動物 野生・家畜・ペットを考える」(朔北社)
「こども地球白書 1999～2007」(ワールドウォッチジャパン)
「犬が訴える幸せな生活」(光文社)
「ペットは人間のお医者さん」(東京書籍)
「イラストでみる猫学」(講談社)
「幸せになる犬との暮らし」(幻冬舎)
「老犬とどう暮らすか」(光文社)
「現代日本生物誌・1～12」(岩波書店)
「絶滅危機動物図鑑」(講談社)
「動物たちの反乱 増えすぎるシカ、人里へ出るクマ」(PHP新書)
その他多数

【主な経歴】

1969年 東京大学農学部畜産獣医学科卒業
1975年 東京大学大学院農学系研究科獣医学専攻博士課程修了
1990年 東京大学農学部 教授
1996年 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
2004年 国立大学法人東京大学 理事・副学長
2005年 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
2010年 東京農業大学農学部 教授
2013年 国立科学博物館 館長



お知らせ

「ミニ企画展」開催

センターが推進している「科学的・計画的な野生動物の保全と管理（ワイルドライフ・マネジメント）」への理解をいただくための展示を行います。

県内に生息する野生動物のはく製展示や野生動物の生息状況、野生動物による農業被害など人と野生動物の間の様々なあつれきをパネルで紹介します。

野生動物の生態や被害対策についてのパンフレットも配布しています。

◆ 平成26年3月14日（金）～16日（日） 篠山市四季の森生涯学習センター



森林動物研究センター施設公開 夏開催予定



森林動物研究センターでは、毎年夏休み期間中に施設の一般公開と研究成果の発表会を開催しています。

なお、詳細が決まりましたら、当センターのホームページなどにご案内いたしますので、是非ともお越しください。



MEMO

